

氏 名（国籍）	延 ^{よん}	明 ^{みよん}	欽 ^{ふむ}	（韓 国）
学 位 の 種 類	博	士	（デザイン学）	
学 位 記 番 号	博	甲	第 3630 号	
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審 査 研 究 科	芸術学研究科			
学 位 論 文 題 目	製品インタフェースの国際的相違とそれに関わる文化からの影響			
主 査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	原 田	昭
副 査	筑波大学教授		蓮 見	孝
副 査	筑波大学教授	博士（芸術学）	五十殿	利 治
副 査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	五十嵐	浩 也

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文の目的は以下の4つである。①製品インタフェースにおいて国あるいは地域間に相違点があるのか。②製品インタフェースに影響を及ぼす文化的な要因の概念化。③製品インタフェースにおける国あるいは地域別の類型の特徴解明。④文化的インタフェース研究における方法論の提案。本研究で比較対象とする国あるいは地域は、日本、韓国、北西ヨーロッパ、米国である。この4つの国あるいは地域は、成熟した電子製品の使用文化を持っており、固有の文化的な背景を有する製造業があり、文化的アイデンティティを有しており、調査対象として適切である。

論文の構成は、1部の理論研究、2部の製品観察研究、3部の文化的イシューの提起、4部の設問や実験で構成されている。

1部の理論研究ではまず、文化についての先行研究を紹介する。これまで、国際経営学の立場から経営に及ぶ文化の役割について、G.Hofstedeの文化次元と、これと類似したF.Trompenaarsの7つの文化次元がある。これらの大規模の設問調査を用いた因子分析から文化次元を抽出し、指数化して提供している。

Hofstedeの研究も対人関係を中心に行っているため、対物関係と言えるインタフェースに彼らの研究を直接導入することには限界があり、文化人類学ではE.T.Hallが高文脈－低文脈、Monochronic time－Polychronic timeの概念を提示し、文化に対する新たな視点を提供している。

2部では分析対象製品として携帯電話、電子レンジ、そして公共機器である横断歩道信号機をあげた。同一の製品に対する国際的な相違点を見だし、インタフェースの相違点を明らかにし、同一地域では、異なるアイテムにおいても同じインタフェースの特性が現れることを見だし、文化による共通性が維持されていることを検証している。

携帯電話の比較調査の結果、日本の携帯電話にはキーやその指示文が多く、待受け画面からメニュー構造を経由せず直接アクセスできる機能が最も多い。また、スクリーン仕様が優れGUI（グラフィックユーザインタフェース）では格子型GUIが多く使われている。また、アイコン表現を好んでいる傾向が強いことを明らかにした。それに反して、ヨーロッパの携帯電話はキーやその指示文が少なく、ほとんどの機能はメ

ニュー構造を経由してアクセスする構造となっている。韓国の携帯電話はやや日本の携帯電話と似たような特性を見せているが、華麗なグラフィックやエンタテインメント機能の存在が特徴的である。アメリカはややヨーロッパと似たような特徴をもっているがテキストに依存しグラフィック表現が少ない点に特徴がある。

電子レンジについては、ヨーロッパでは単純なインタフェースの機械式が好まれ、アメリカでは電子式が、日本ならびに韓国では高度な電子式インタフェースが好まれている。

また、横断歩道信号機からはアメリカの低文脈性が見える。日本と韓国の信号機では時間表示の意味の違いが存在することを見出した。

3部では、1部の理論研究、2部の実証的な調査に基づいて、14項目の文化的 이슈を提示し解説している。

4部ではこれらの 이슈の有用性を検証するため、オンライン設問調査および実験を行っている。分析の結果、製品の操作学習方法、キャラクタに対する選好度、エラーの原因に対する考え、情報の簡潔さ、製品に対する愛着、アナログ式－デジタル式の好みなどの項目から有意な差異が見つかった。

本論文の結論として、①製品観察調査から、製品インタフェースにおける国あるいは地域における差異の存在。②文化的 이슈に関する概念定義。③製品インタフェースにおける国あるいは地域における差異の存在。④製品観察、理論研究、設問や実験など多様な研究方法の有効性について明らかにした。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、これまであまり触れられてこなかった工業製品におけるインタフェースと文化との関係についての研究であり、特に4つの国あるいは地域におけるインタフェースの相違点を膨大な製品資料とWEBを用いたネットワークリサーチ手法を基に実証的に明らかにした点で極めて貴重な研究である。視点の独創性、研究方法、研究成果の全てにわたって、学位請求論文としての十分な水準に達している。この論文はインタフェースについて、これまでのような論理的モデルとして操作効率を向上させるという方法論から、文化的視点を導入することの必要性を実証している点で、デザイン学に新たな研究の視点を開示し、その有効性を考察した点で学術的意義は極めて大きい。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。